ることからも、家庭における教育意識が高い様子が伺えます。一言でいえば恵まれている環境で、健やかに育っていると思われがちな文京区の中高生ですが、ありのままの姿をみせる b-lab で見える現実は、その内実が実に様々であることを思い知らせてくれます。

親の期待と自分の思いに悩む高校生。毎日夜遅くまで b-lab を利用する中学生。いい子過ぎるゆえに、対人関係に悩む女子高生。受験前、イライラして癇癪をおこす中学生。思春期を迎え、自分自身と向き合い、右へ左へと揺れるアンビバレントな心に押し寄せる波に、中高生は翻弄されています。さらに、SNS が浸透し、コミュニケーションから逃れることが難しくなった現代において、中高生は「コミュ力」を磨き、様々な顔を使い分け、下手に尖って集団から排除されないよう、バランスをとりながら生きています。

自分は何者なのか。若者の自己肯定感の低さが言われて久しい昨今ですが、思春期特有の心の揺れに葛藤しつつ、周りに合わせながら生きていく今の中高生の現実は、これまでの時代よりもアイデンティティを確立する難しさを内包しています。どんな環境にいようとも、このような「試練」はあらゆる中高生に訪れているのではと感じます。この荒波に立ち向かう中高生のためには、学校や家庭以外の、地域や社会からのサポートも必要です。

⑤ 揺れる気持ちを受け止める

支援者が中高生のためにできることは何か。まずは、揺れ動く心を受け止めてあげることが必要かもしれません。強い自分も、弱い自分も、明るい自分も、落ち込む自分も、それでもあなたはあなたであると、あるがままの一個人を受け止めてくれる存在が、中高生には必要です。

いつもは友達と一緒に来る高校生 A が 1 人で来館したある日、A は何をするわけでもなく、受付近くの椅子に腰かけました。談話スペースで楽しそうに話す他の中高生を眺めながら、しばらくスタッフととりとめもない話をしていたところ、「あのさぁ」と口火を切り、クラスの中で自分としかコミュニケーションが取れない子がいること、その子がかわいそうだから話し相手になってあげたいと思う自分もいるが、他の子とも一緒にいたい気持ちもあり、どうしてよいかわからないという葛藤を話し出しました。少しうつむきながら話す A から零れ落ちるのは、やさしい自分でありたいという気持ちと、あるがままの自分でいたいという気持ち。どちらも自分であるのに、もどかしい。「おまえはほんと優しいやつだよなぁ。でも、あんまし無理するとつらいもんなぁ」。これまでも A に伴走してきたスタッフは、A の気持ちをそのまま代弁しました。正解はわかりませんが、その日、少しだけすっきりした顔で A が帰っていったのは、気持ちを吐露できた、受け止めてもらえたという安堵感ゆえだったのかもしれません。たまに来て、ちょっとだけ休んで、また飛び立つ。そんな止まり木のような価値が、家庭でも学校でもない、地域の居場所にはあるように思えます。

⑥ 「きっかけ」を通して、自分と出会う

自分と出会うためには、いろんなことを試してみる「きっかけ」が大切です。中高生とひとくくりに言っても、スポーツが好きだったり、音楽が好きだったりと多種多様。そのニーズに可能な限り応えるべく、専門学校の先生が楽器の弾き方を教えてくれる講座もあれば、コーヒーを嗜みながら好きな本について語るイベント、はたまた、童心にかえって本気でドッヂボールをするイベントもあれば、将来のことについて大人も交えながら真剣に語り合うイベントを仕掛けています。あらゆる中高生が喜ぶ「魔法のイベント」は、正直に言って未だ見つかりません。だからこそ、少数であっても、一人ひとりの興味関心に沿ったイベントを行うことが大切だと考えています。日常のなかで呟いた中高生の「やってみたい」をいかに「きっかけ」に接続できるか。スタッフの腕が問われるところです。

⑦ 「お客様」からの変容

そして、中高生が自分を見つけるうえでは、「青春」が必要です。言い換えるならば、がむしゃらに、情熱の赴くまま手を動かしてみたという経験です。

b-lab におけるイベントは、なにもスタッフが中高生に届けるものばかりではありません。いわば中高生自身が常に「お客様」である必要は、一切ないのです。アニメ好きとドラマ好きに分かれ、お互いの魅力を語り合ってみたり、どうしようもなく興味をもってしまった「菌」に関する知識について熱く語ってみたり。そんなときは、むしろスタッフも、他の中高生に交じって「お客様」。誰に求められているわけでもなく、好きなものに本気で取り組む姿は、ただただ、かっこいい。これはスタッフもイベントを行う上で心掛けていることであり、転じて中高生に目指してほしいロールモデルでもあります。謎解き脱出ゲームに強い興味のあった B は、ある日、同じく謎解き脱出ゲームを面白がってくれる C や D と出会い、実際にイベントを企画することになりました。持ち前のマニアックな知識を駆使した本気のイベントは、「自分も作ってみたい」という憧れの連鎖を生み、参加者が企画者に回る循環を生んでいます。枠にとらわれず、自由な挑戦ができるのも、地域における居場所の価値。まず、やってみる。総利用者から比べれば一部ではありますが、「お客様」ではなく、中高生自身が当事者になってみる機会が重要と感じています。

⑧ 自分の一歩で世界は動く

なぜ、当事者になってみる機会が重要なのか。それは自分の行動によって、誰かの行動が変わることを体験的に知る機会になるからです。「ありがとう」「楽しかった」他者からのリアクションは、わかりやすく自分の行動が誰かに影響を与えたことを実感します。目の前の世界は自分が自分らしく関わることで何か動く。そう思える状態になって初めて、内に秘めた自分を表出できるのではないでしょうか。それは、必ずしも成功体験とは限りません。音楽スタジオの利用時間割に違和感を持った E は、その思いをスタッフにぶつけましたが、変更するためには条例を改正しなければならず、多方面に善処したものの、結果的に E の思いは叶いませんでした。思いが叶わず、憤るかもと思いきや、E の反応は違いました。「悔しいけど、すっきりした！」願いが叶わずとも、信頼できるスタッフとともに行動した結果、何かが、動いた。このような経験を中高生に提供できることがひとつ価値であると信じ、スタッフ一同、中高生と向き合っています。

⑨ 終わりに～地域において中高生と向き合い続けるということ～

以上、弊団体の活動理念と b-lab での活動を軸としながら、地域の居場所が中高生に届けられる価値について考えてみました。振り返ると、中高生が自分らしく生きる力を獲得するためには、ホンネで向き合う支援者の存在があるのではと感じます。これからも枠にとらわれず、「ナナメの関係」と「本音の対話」を大切にしながら、まっすぐに中高生と向き合っていきたいと思います。